植木研介さんを偲ぶ　　鈴木盛久

広島大学マスターズ広島代表幹事の植木研介さんが，2023 年（令和 5 年）12 月 20 日 79 歳の生涯を閉じました。当日，奥様の佑子さんから伝えられた急逝の報に，わが耳を疑い，呆然としました。研介さんは普段から５時前起床，ウォーキング，近所でラジオ体操というルーティンをきちんと守っていたそうですが，その日は起床予定時刻を過ぎても起きてこず亡くなっていた，ということでした。実は研介さんとは小学校以来 70 年以上にわたって友誼を結んできたものですから，今でも信じられない思いです。

研介さんと私は共に 1944 年広島市生まれで，広島大学教育学部附属東雲小学校（1951～57），同附属東雲中学校（57～60），同附属高校（60～63）を一緒に過ごしました。佑子夫人も中学高校の同期生です。研介さんは小中学校時代から頭脳明晰，成績優秀，弁舌さわやかでした。中学校の休み時間，放課後には，やはり論客の同級生数名でいつも議論していました。子どもにしては非常にませていたのでしょう，内容は，政治，経済，哲学，歴史等幅広く，しかも難解なテーマだったことを思い出します。ちなみに私は晩生でしたので，なかなか話に入っていけませんでした。大学は研介さんが京都大学，私は広島大学と別々になりましたが，それぞれ大学院を終えて広島大学に職を得，学部は研介さんが文学部（英文学），私は理学部（(のちに教育学部）地球科学）と違いましたが，旧千田キャンパスの隣り合わせの学部で勤務しました。研介さんは一時期愛媛大学に異動したこともありましたが，共に広島大学で長く過ごし，2008 年定年退職しました。

その前後に，参与の金田晉先生から研介さんと私にお声がけを頂いて，マスターズ広島の設立準備に参画し，2010 年の設立以降その活動に携わってきました。研介さんは 2 代目の代表幹事を通算 10 年も務めているところで，常にリベラルな立場に立って，ユーモアを交えた弁舌をふるい，会の活動をリードしてきました。数年前，会員が担当する「平和科目」など授業について，その在り方が問題になったことがありましたが，研介さんが将来を見据えて，授業運営の根本について大学当局へ強く問う姿はとても印象に残っています。イギリス留学の経験もある研介さんを評して，ご友人の英人ジャーナリストが「頑固な自由主義者」と述べたそうですが，言い得て妙とはこのことかもしれません。なお，ご長女の今村玲子さんも元附属病院医師として会員となられ，例会参加等ご一家で活動してこられました。

研介さんは，0 歳児の時に皆実町の自宅において被爆しました。その際，ガラス片によって左目の視力を失うというご自身の重い被爆体験があり，小学校の高学年以降，夏場，特に８月６日前後は体調を崩して臥せることが増えたようでした。原爆に関する報道なども避け，いわゆる PTSD（精神的外傷後ストレス障害）による不調が続いたようです。大学生になって次第に回復してきたようですが，その後も続く PTSD の克服のために，例えば 37 歳の時，あえて 8 月 6 日を選んで夫人，小学生のお子さん 3 人を伴って，石鎚山登頂に挑戦，成功するなど並々ならない努力を重ねたそうです。それでも，平和記念資料館に入れるようになったのは 50 歳，原爆投下 50 年を経てから，ということでした。

研介さんは，前述のご自身の被爆失明，さらに叔父様も原爆死されたという重い体験もあり，一貫して反核平和を訴えてきました。例えば 1990 年代に平和公園内のレストハウス(元大正呉服店)が市により解体という方針が出された際には，保存を訴え，1995 年 12 月 26 日小雪舞う早朝から，ご夫婦で市役所前，そごう百貨店前に立って自作のビラ配布をしました。ビラは 400 字詰め原稿用紙 ５枚に研介さんが徹夜で文章を纏め，傍でそれを夫人が清書し，自宅コピー機でコピーした，まさに自作ビラでした。その後，「元大正屋呉服店を保存する会」に加わり世話

人代表も務めました。こうした保存活動が実り，結果として市による解体案は撤回，2020 年 7 月にリニューアルされ，現在，国史跡の被爆建物として指定するよう市が申請中という運びになったのも研介さんたちの尽力があったが故と思います。2017 年 12 月には，ノーベル平和賞を授与される ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のサポーターの一員として，また広島と長崎の被爆者 30 名の一人としてノルウェーのオスロに出向きましたが，被爆者としての強い使命感を感じる行動でした。

小学校以来の畏友を失い，悲しみは非常に深いものがありますが，研介さんの遺志を継ぎ，マスターズ広島の活動がさらに盛んになりますよう微力を尽くしたいと思っています。